

—— 付 —— 長崎県の古墳

長崎県は他の県に比べ、いわゆる高塚式の古墳の数が非常に少ない県である。^{註1}

この現象が、どのようなことの表れかを推測することはある程度可能ではある。

まず、本県の地勢について概観すると、一言でいうなれば、いわゆる『魏志倭人伝』の「一海を渡る千余里、対馬に至る」「山險しく深林多し」「良田無く、海物を食して自活し、船に乗って南北に市糴する」の部分の如くで、さらに対馬より平地が多い壱岐国においても「水田は在るが食べるには足らず、ここでもまた南北に市糴する」といった状況であり、この傾向は五島列島、さらに本土部においても、一部を除いては例外とは言えない。

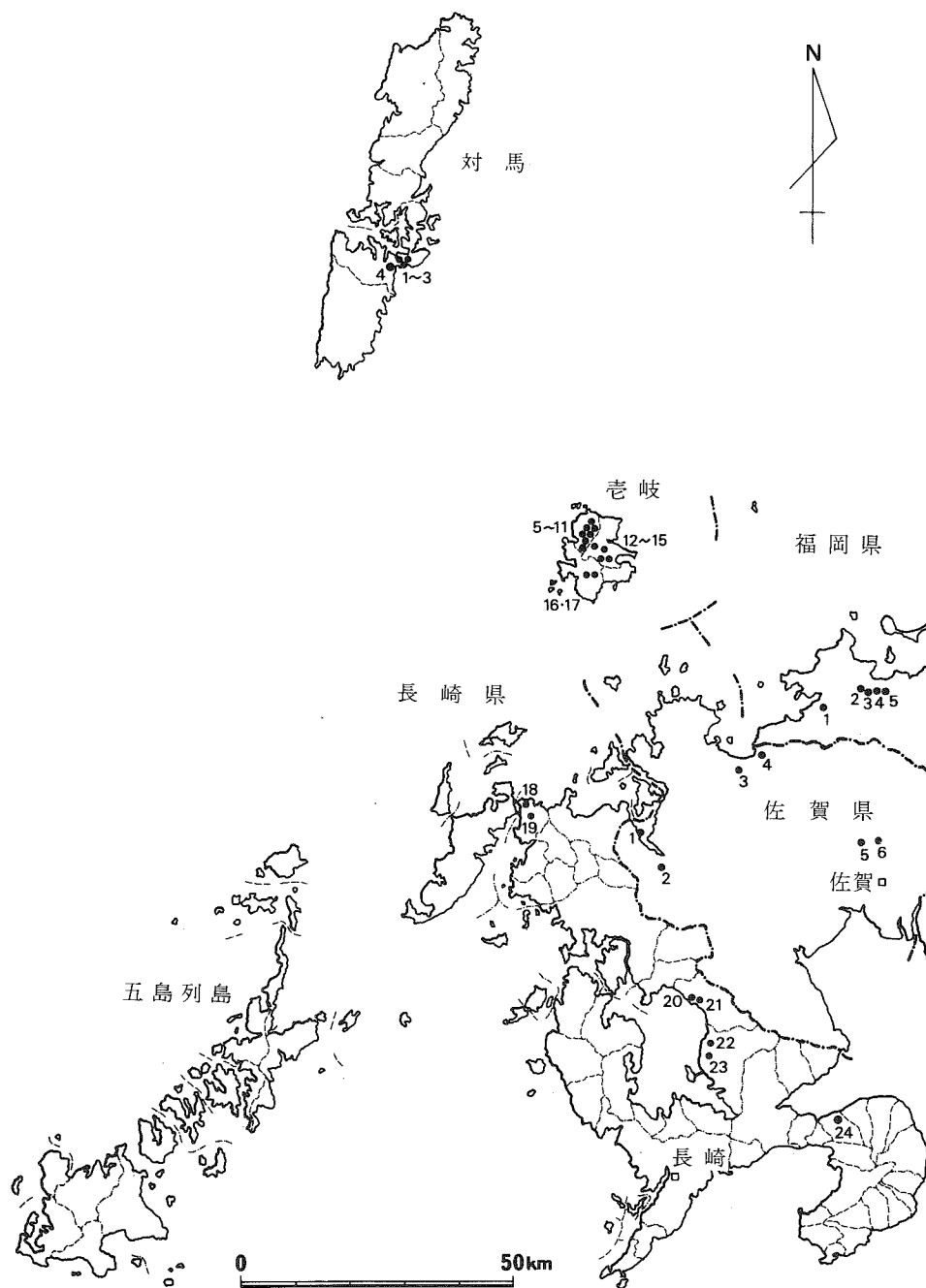
現在の、県別における総面積に対しての耕地面積の割合を見てみると、長崎県は少なく、それ以上に水田部の占める割合が、福岡県の17%、佐賀県の21%にくらべ長崎県は7%と、北部九州の各県でみて、 $1/2$ から $1/3$ と^{註2}、格段の違いを示している。このようなことが、全県的に古墳の数の少ない原因の最大のものではないだろうか。

例外としては、対馬の難知周辺・壱岐の深江田原・東彼杵町の彼杵川流域・大村市の郡川流域・有明海をはさんだ多良岳南麓と雲仙北麓などの平地に、古墳の存在が多く知られている。これらの地域は、割りあいに平地が多く、水も得やすく、農業生産に適した場所ではある。しかし、この他にも、周辺に平坦地を持たず、海を生活の重要な部分としていたと考えられる、長崎市の曲崎古墳群・^{註3}南串山町の^{註4}国崎遺跡などの存在も知られている。

対馬・壱岐に分布が多いが、特に対馬はその東海岸、浅茅湾に近い難知周辺に、また、壱岐の場合はほぼ全島に分布するが、一般的な傾向としては同島中央部付近に集中している。これはいずれも畿内政権との結び付きの方からも説明されている事象である。すなわち難知には対馬最初の前方後円墳の出現が知られ、朝鮮半島、北部九州と畿内を結ぶ要衝であるこの地に、中央の出先機関とも思えるものの存在を示すものであり、壱岐の場合は、国分寺等もあり、政治的中心である地域に濃く分布しているのであろう。それにしても長崎県内の約420箇所の古墳のうち、260余箇所と、60%強の古墳が壱岐に集中しているという事態については、この壱岐島の面積が全県での約3.4%の面積しかないということから考えても、いささか異常なことと考えざるを得ない。壱岐の耕地面積は島の約26%、そのうち田は16%で、かなり水田率の高いのは事実であり、同じく対馬の場合の耕地面積が1.7%強、そのうち水田は1%をわずかに超すに^{註5}すぎないのに比べると、その差は歴然たるものがある。それにしても古墳の数が多いたのは、後世における破壊をさほど受けなかったこと・石室構築材としての石材の豊富さなど、複数の要因が考えられるが、ここではそういう事実のみ、問題の提起のみにとどめておきたい。

長崎県の前方向後円墳

長崎県では、前方向後円墳はどのような在り方を示しているか、全県的な分布の状況と、近接



第9図 長崎県の前方向後円墳

する北部九州西側部分における分布の状況を、第9図に表してみた。しかし、佐賀県・福岡県での分布の状況は、図に示した以上に濃厚で、ここには割に著名な前方後円墳のみをあげている。これに対して長崎県内では、現時点までに確実なものとしては24例が知られているに過ぎない。そして、これらのうちでも偏りが極端に近い状況で認められる。壱岐に全県での半分以上、13箇所が集中しているのは、古墳全体の分布の状況と比較してもおかしくはない。対馬では、畿内政権との関係の面から指摘されることの多い、雞知方面に4箇所あり、本土部では7例しか知られていない。平戸・五島列島・西彼杵半島・野母半島には全く知られておらず、島原半島にも北部に一例が残るのみである。

以上のような状況のなかで、一種の空白地帯とも呼べるような北松浦地方での前方後円墳の存在については、大きなものがあるように考えられる。

第2表 長崎県の前方向後円墳

名 称	所 在 地
1 根 曾 一 号 墳	下県郡美津島町
2 根 曾 二 号 墳	下県郡美津島町
3 根 曾 四 号 墳	下県郡美津島町
4 出 居 塚 古 墳	下県郡美津島町
5 百合畑古墳群1号墳	壱岐郡勝本町
6 百合畑古墳群3号墳	壱岐郡勝本町
7 百合畑古墳群14号墳	壱岐郡勝本町
8 百合畑古墳群15号墳	壱岐郡勝本町
9 百合畑古墳群20号墳	壱岐郡勝本町
10 対 馬 塚 古 墳	壱岐郡勝本町
11 双 六 古 墳	壱岐郡勝本町
12 妙 泉 寺 1 号 墳	壱岐郡芦辺町
13 山ノ神1号墳	壱岐郡芦辺町
14 観上山1号墳	壱岐郡芦辺町
15 観上山2号墳	壱岐郡芦辺町
16 大原天神の森1号墳	壱岐郡郷ノ浦町
17 大原天神の森2号墳	壱岐郡郷ノ浦町
18 岳 崎 古 墳	北松浦郡田平町
19 笠松天神社古墳	北松浦郡田平町
20 ワレ権現塚古墳	東彼杵郡東彼杵町
21 ひ さ ご 塚 古 墳	東彼杵郡東彼杵町
22 石走古墳群1号墳	大 村 市
23 茶屋の辻古墳	大 村 市
24 守山大塚古墳	南高来郡吾妻町

(古墳名は遺跡台帳による)

佐賀県

名 称	所 在 地
1 小 島 古 墳	伊万里市山代町久原
2 奎路寺古墳	伊万里市二里町川東
3 島田塚古墳	唐津市大字鏡
4 谷口古墳	東松浦郡浜玉町
5 船塚古墳	佐賀郡大和町久留間
6 銚子塚古墳	佐賀市金立町金立

福岡県

名 称	所 在 地
1 銚子塚古墳	糸島郡二丈町田中
2 丸隈山古墳	福岡市西区周船寺
3 若八幡宮古墳	福岡市西区徳永
4 今宿大塚古墳	福岡市西区今宿
5 鋤 崎 古 墳	福岡市西区今宿青木

墳丘の規模はさほどでもないが、里田原遺跡という弥生時代からの遺跡で実力を培ってきたと思われる豪族が、地方支配のため前方後円墳という、形として畿内政権と結び付きを持ったことを表わすものと考えられ、畿内政権の影響が、本州最西端というべきこの地方まで及んだことを示すものと考えられるからである。また、正式な調査はあっていないが、もう一つの岳崎古墳は、壱岐水道に臨んだ台地上に位置している。この古墳は、周辺にその農業生産の基盤となるような平坦地を持っていない。このような状況からは、端的に言うならば、対馬難知の前方後円墳群と同様の、西日本あるいは畿内と半島を結ぶ海上交易、あるいは海を直接・間接に生活の舞台としていた人物の墓地、と考えるのが自然であるといえるかも知れない。

今後、北松浦地方でも、特に松浦市を通る海岸部での、北部九州との交流を示す前方後円墳の存在が知られるようになることを期待したい。

田平町の古墳

高塚式の古墳が少ない本県においても、北松浦地方の本土部には特に少ない。田平町内には、古墳時代の遺跡としてはわずかに4箇所しか知られていない。このうち、里田原遺跡は、平地の南東部から古墳時代の遺物が出土したことなどによっている。弥生時代から続く人々の生活の跡^{註6}と考えられる。中野ノ辻遺跡は、里田原遺跡南側2kmほどの所に位置する墳墓群である。釜田川を遡った場所にある小盆地南端部の丘陵上に立地しており、その北側にある30ヘクタールほどの平地に臨んでいる。昭和55（1980）年の秋の第一次調査と、56（1981）年5月から6月にかけての第二次調査がなされた。この結果、14基の箱式石棺が検出された。しかし、ほとんどは「弥生時代に属する可能性が高く」、ただ1基のみについて「弥生から古墳期に到る過渡的な位置にあるのかも知れない」と^{註7}とされている。町内には、これ以外の古墳時代の遺跡としては、今回調査した笠松天神社古墳と岳崎古墳があるのみである。そして、前方後円墳に続く高塚式古墳が、現時点では全く認められていない。高塚を持たない、弥生時代からの地方的な伝統としての箱式石棺墓群が、まだ知られないまま存在する可能性も考えられる。いずれにしても、当地方における古墳時代社会の成長の程度が、多くの群集墳を造り、残した地方と異なっていたことによるものと考えられる。

註1) 『長崎県遺跡地図』長崎県教育委員会 1987年

2) 『長崎県統計年鑑』『長崎県民手帳』長崎県 1988年 他

3) 『曲崎古墳群調査報告書』長崎市教育委員会 1977年

4) 南串山町教育委員会で昭和63年度調査 1989年に報告書刊行予定

5) 註2等による

6) 『里田原遺跡』田平町教育委員会 1985年 他

7) 『中野ノ辻遺跡 里田原遺跡』田平町教育委員会 1982年